

カーティス・ルメイ

——戦略爆撃の思想と行動

島川 雅史

総力戦と戦略爆撃

近現代の大規模戦争は「総力戦」であると言われる。総力戦とは、人的・経済的資源の全てを戦争遂行のために動員することであり、アメリカの南北戦争を始めたとする概念である。航空機が主役となる時代を迎えて、総力戦の考え方に基づく航空攻撃の論理として、「戦略爆撃」という構想が生まれてくる。

戦略爆撃とは、個別の兵力や基地など軍事目標への「戦術爆撃」とは異なっており、総力戦の基盤である経済的資源を全て覆滅しようとするものである。航空機に例えれば、航空機工場や燃料工場・貯蔵施設、部品や原料、輸送手段などを破壊して、軍用機生産や航空機の行動そのものを止めるということである。

第二次大戦後期には、攻撃は焦土作戦となった。B-29による日本爆撃の指揮者であったカーティス・ルメイが、敗戦直後の東京で焼け焦げて並んでいるボール盤の残骸を見て、これが成果の証拠だと目を輝か

せたというエピソードがある。経済的資源を全て覆滅しようとする企図は零細・小規模な部品工場にまで及び、小工場が混在する下町は優先目標であった。米軍は、零細な下請けが大企業を支える日本の産業構造を理解していた。

戦闘員と非戦闘員を区別しない無差別爆撃は、米英軍によるドイツ・日本爆撃によって絶頂期を迎えるが、その創始者はドイツ・日本の側であった。スペイン市民戦争におけるドイツ空軍のゲルニカ爆撃がその端緒である。日中戦争期には重慶に後退した国民党政府に対して、日本は陸海軍の双発攻撃機を用いて累次の爆撃を行なった。

爆撃には焼夷弾も使用され、死者一万（二万人と推定されるなど住民に大きな被害を与えたが）、日本の攻撃機は爆弾搭載量・機数とも少なく、東京大空襲のような壊滅的効果は得られなかった。大戦中のドイツ空軍によるロンドン爆撃なども同様で、イギリスは被害を受けながらも戦闘機と対空砲で迎撃し「バトル・オブ・ブリテン」に勝利した。

様相が一変するのは、大戦後期に欧州戦域で英軍のランカスターと米軍のB-17、後の太平洋戦域でB-29という、大型四発の重爆撃機が大量に配備されるようになってからである。そしてドイツ・日本のどちらにおいても、ルメイは第一線の指揮官であった。

カーティス・ルメイと第二次大戦 ——東京大空襲

ルメイは一九〇六年生まれ。航空戦力の急拡張とともに、四一年少佐、四二年に中佐、大佐、四三年准将と異例の昇進を続け、第三〇五爆撃群を率いて欧州戦線に参加した。当時、B-17は対空砲火を避けるためにジグザグ飛行をしていたが、ルメイは爆撃精度が落ちるからと直進を要求した。乗員は恐怖したが、弾幕の中では被弾確率は変わらないという目算で、実際被害は少なかった。対戦闘機戦闘に有効な密集体形を考案し、他の在欧部隊もこれにならうようになった。ルメイは単純な猪突猛進者ではなく、戦場の実情、効果と損害を考量した合理主義者であった。

一九四四年七月、ルメイは第二〇爆撃航空軍司令官（少将）として太平洋方面に転戦する。インドを拠点として成都を中継し、北九州や台湾などを攻撃するB-29の部隊

であった。そして四五年一月、日本空襲主力のマリアナ諸島基地、第二一爆撃航空軍の司令官となる。

前任者は、昼間高高度からの精密爆撃という方法をとっていた。ノルデン爆撃照準器に信を置き、日本の対空砲火を避ける攻撃法であった。日本の高射砲で、一万メートルの上空まで届くものは僅かだった（東京二門）。しかし、日本の高空にはジェット気流が吹いており、機体や爆弾の直進を妨げて命中率は悪かった。雲の多い季節で照準も困難であった。中島飛行機東京工場への爆撃では、敷地内目標への命中率は七％に留まった。B-29は初期三二回の出撃で、一か所を除き壊滅させることはできなかった。

ルメイは前任者の攻撃法を引き継ぐが同じ結果で、陸海軍首脳や大統領に批判されていたアーノルド陸軍航空軍司令官から結果を出せと叱責されている。アーノルドからの焼夷弾使用の「勧告」もあって、ルメイは英空軍がドイツ空襲で行なっていた夜間無差別爆撃に焼夷弾を組み合わせる低空爆撃に転換する。

ドイツと異なり射撃用レーダーを持たない日本の高射砲と夜間戦闘機は探照灯に頼るしかなく、低空でも損害は少ないと判断された。ドイツで米英軍を苦しめた高射機関砲

も日本では少なかったので、機関砲射程内の低空でも被害は少ないと見積もられた。

攻撃面でも精密爆撃の必要はなく、面的に火網を被せれば目標は焼滅できる。焼夷弾の中でも、特に油脂ナフサ混合のナパーム弾は燃焼力が強く水での消火が困難であり主用された。ナパーム弾はすでに開発されており、四三年三月には日本式木造家屋の建ち並んだ実験場で爆撃試験も行なわれ、日本と同じ装備の消防隊が組織されて、消防能力を超える有効性が確認されていた。陸軍航空軍は、詳細な焼夷弾攻撃計画を策定し、ナパーム弾の大量生産など入念な準備をしていた。ガス弾攻撃の計画もあった。ルメイの夜間低空焼夷弾攻撃が実施されたのが、四五年三月一〇日の東京大空襲である。

当時ルメイの部下として爆撃の効果判定をしていた後の国防長官ロバート・マクナマラは、精密爆撃が効果が少ないという報告書を提出していた。マクナマラは回想映画『フォッグ・オブ・ウォー』で、「戦争で勝つために一晩で一〇万人の民間人を殺してもいいのか」とルメイを非難している。さらに、各都市の焼跡写真を並べて「六七都市の五〇〇九〇％の人びとを殺害し、なおも原爆を投下するのは達成目標に比べて均衡が取れているとは言えない」と語って

いる。ベトナム戦争を推進し核軍備を拡大したマクナマラが言うのも奇妙であるが、殺人を厭わないルメイには耐えられなかったと言う。

マクナマラは、原爆投下についてもルメイの命令だったと非難しているが、これはワシントン直轄の極秘作戦で、ルメイは現場指揮官として対応した。国防総省の人物紹介には、ルメイは焼夷弾攻撃で十分で原爆は不要と考えていたと書かれている。またルメイは、空軍歴史官のインタビュの中で、原爆が特別に恐ろしいわけではない、我われは焼夷弾で原爆より多くの人間を殺している、と語っている。「戦略爆撃の思想」からすれば、東京と広島・長崎は本質的に異ならない。手段として、東京は三二五機のB-29が必要であったが、広島・長崎はB-29ただ一機のみという違いである。

無差別爆撃については、マクナマラはルメイが「負けたら我われは戦争犯罪者として起訴される」と言ったと語り、ルメイは「モラル」に反することを理解していたと言う。そして、しかし勝てば許されるのか？と反問している。ルメイの答えは、日本人は市民・子どもまで武装して非戦闘員とは言えない、というものである（女学生の竹槍を武装と言うなら、確かに大真面目で刺突訓練をしており一億玉砕も叫ばれた）。そして、降

伏を早めて本土上陸作戦を回避でき米兵五〇万人と日本人三〇〇万人を救ったのでやむを得ないと言う。アーノルドも、市民に戦争反対行動を促すために犠牲は仕方がないと語っている。

作戦名「飢餓作戦」は、海軍が日本封鎖作戦の一環として陸軍航空軍に要請した機雷敷設作戦である。海軍の要求は月に一、五〇〇個の敷設であったが、ルメイは計画を拡大して四個爆撃群を投入した。四五年三月末から開始され、B-29は、磁気・音響・水圧感應機雷などを日本沿岸に投下した。

潜水艦の入らなかつた瀬戸内海には六、〇〇〇個の機雷が敷設された。総計約一四、〇〇〇個、一万トンの機雷によつて、六七〇隻一二五万トンの船舶が撃沈された。潜水艦や航空機による損害も相まつて、海上交通は外航・内航とも壊滅的な打撃を受けた。例えば神戸港の七月の荷役は三月より八五%減少している。これは戦略資源に加えて朝鮮・満州などからの食料輸入を途絶させ、作戦名の通り総力戦の人的資源に餓えと緩慢な死をもたらすものであった。

第二次大戦後のルメイ ―キューバ危機と未来の核戦争の先取り

戦後もルメイは中将、大将と栄進を続

ける。一九四六年戦略空軍(SAC)の初代司令官となり一〇年間その任にあった。五〇年代から六〇年代にかけて、SACはB-36、B-47、B-52と続く大型爆撃機で、多数の基地と空中給油によつて世界中どこでも核攻撃可能な態勢を作り上げた。ルメイは五七年に空軍副参謀総長となり、六一年七月、空軍参謀総長に到達する。

空軍最上位となつたルメイの上司の国防長官は、かつての部下マクナマラであつた。ルメイの提案したB-52後継のB-70計画を、弾道ミサイルを優先するマクナマラが却下するなど、二人の間には確執があつた。激しい対立となつたのは、キューバ危機とベトナム戦争を巡つてである。

キューバ危機では、ルメイは軍部強硬派の先頭に立ち、キューバのソ連軍ミサイル基地の空爆と全面侵攻を主張した。ケネディ政権は本格的侵攻を準備しつつ先ずは海上封鎖を実施したが、ソ連基地は既に核弾頭を持ち、ソ連潜水艦の核魚雷が発射寸前であつたり、沖縄の核ミサイルサイトには発射命令が届くなど、錯誤を含めて開戦直前の状況であつた。

キューバのソ連軍への空爆と上陸侵攻が、第三次大戦・核戦争へとつながることは明らかであつた。ルメイもそれはわかつていたはずである。ルメイを戦争屋、無闇

に好戦的な人物とする見方もあるが、敵に冷酷であつたにせよ、それほど単細胞的な人間ではない。

マクナマラは、ルメイは将来の核戦争は不可避だと考えていた、だから米国が優勢なうちにソ連を攻撃せよと主張したのだと述べている。マクナマラは核弾頭数で一七対一の優位にあつたと言ひ、国防長官であつた七年間にソ連との戦争の危機は三回あつたと述べている。

ベトナム戦争では、中国・ソ連の参戦を危惧するジョンソン政権はマクナマラ長官の限定戦争方針に対して、ルメイは制約のない全面的な爆撃を主張した。「ベトナムを石器時代に戻せ」という叫びは有名である。

未来の核戦争の先取りが現実化していたなら、大量破壊と当時は知られていなかった核の冬の到来で、世界が石器時代に戻っていたであろう。一九六四年、日本政府はルメイに対して、航空自衛隊育成の功績として、勲一等旭日大綬章を贈っている。

(しまかわ・まさし／歴史学)